

福島県立梁川高等学校は、令和4年度、2023年3月をもって103年に及ぶ歴史の幕を閉じる。そして、令和5年度、2023年4月からは、保原高校と統合し、新しい高校として生まれ変わる。昨年からの新統合校のグランドデザインを描く作業が始まった。

全く新しい高等学校をつくるということは、教育目標、校訓、教育方針、校章、校歌、教育課程そして何よりも校名とすべてを一から考えるということである。長いスパンによる壮大なプロジェクトである。とはいっても時間的なゴールが設定されている。ゆっくりもしてられない。

これらの重要なことを誰が担当するのか。それは保原高校の先生方と福島県教育委員会、そして梁川高校の先生方である。この三者で考えていくことになる。したがって梁川高校は重要なミッションの一翼を担っていることになる。昨年の11月に創立百周年記念式典を無事に終えることができた本校にとっての次なる宿題ともいえるものである。

新しい高校をつくるといっても梁川高校が脈々と受け継いできたよさを継承したいと考えるのは当然のことだろう。私はそれを“梁川イズム”とした。しかし、保原高校でも同様によさや特徴を受け継いでいきたいと考える。両校のよさや特徴、持ち味を併存させたいところだが、これがなかなか容易ではない。

新統合校は福島県教育委員会から「キャリア指導推進校」に位置づけられている。これは、大学等への進学や就職など、幅広い生徒の進路希望や生徒の学習ニーズに対応した教育活動の充実を図り、地域を支える核として社会に貢献できる人づくりを担うものである。新統合校は伊達市ならびに伊達地区唯一の県立高等学校となる。この定義を新統合校に当てはめると、高校卒業後に進学や就職を考えている伊達市を含む伊達地区の中学生が高校3年間で自分の進路を実現し、伊達地区の発展を支える人材となることができる学校となろうか。

キーポイントは「幅広い生徒の進路希望や生徒の学習ニーズに対応した教育活動」である。これが簡単ではない。国公立大学に進学する生徒がいる。県内外の私立大学に進学する生徒がいる。専門学校に進む生徒がいる。地元で就職する生徒がいる。大学に進むためにはそのための学力をつけなければならない。就職のためには資格を取得したほうがよい。これらのことを1学年普通科6学級で行うのである。伊達地区の中学生に、福島まで行かなくても「〇〇高校に行けば、大学にも入れるし、就職もできる」と思ってもらえるようにしなければならない。そのための魅力や特色を打ち出さなくてはならない。

以前からやってみたいことがある。「今度保原に新しい高校ができますが、みなさんならばどんな高校がいいと思いますか」あるいは「みなさんが通っている梁川高校のいいところを挙げてみてください」などと本校生徒に聞いてみるのである。大人とは違った発想が出てくるかもしれない。何せ考えている大人が皆教員である。どうしても視野が狭くなるのは否めない。

現在は、保原高校が普通科4学級、商業科1学級、計5学級である。梁川高校は普通科2学級である。あわせて7学級である。それが新統合校になると普通科6学級となる。1学級減となるが、生徒数の減少を考慮すれば、狭き門となることは考えにくい。想定通り「幅広い」「多様な」進路希望に対応しなければならなくなる。そのための教育課程、教育活動として、どのようなことが考えられるか。今年は本腰を入れて、保原高校と県教委とともに歩んでいかなければならない。これは私に課せられた使命でもある。まさしく「三位一体」とならなくてははいけない。